

エピソード11

～ねぎらいの言葉～

50代 中学校 男性

掃除当番をサボってばかりいるA君が珍しく掃除をしている姿を見つけました。私は思わず「ご苦労さん。」とねぎらいの言葉をかけました。しかし、いつも真面目に黙々と掃除をしているB君がA君のすぐ横にいたのに、私は何も声をかけませんでした。本当はB君の方が何倍も立派で「ご苦労さん」のはずなのです。

どうしても気になった私は、帰り支度をしていたB君に「君はいつも真面目に掃除をしているなあ。えらいと思うよ」と声をかけました。するとB君は「先生、僕は掃除がそんなに嫌いじゃないんです。机がきちんと並んでいるのを見ると気持ちがいいのです。」という言葉が返ってきました。B君の照れ隠しの気持ちもあったのだとは思いますが、掃除当番をみんなが嫌がる忌むべき仕事として考えていた自分が恥ずかしく思えました。

こんな場面があります。いつもテストで90点以上を取るA君がテストで70点を取ってしよげていました。一方で、いつも50以上を取ったことがないB君が70点を取って大喜びをしています。先生は当然A君を慰めB君を讃えます。先生は70点という点数で生徒に掛ける言葉を選んでいるわけではありません。その生徒の状況や気持ちを考えてよりよい励ましの言葉かけをしようとするのです。このように、相手の気分や気持ちを理解しようと努め、相手の気持ちになって考えようとする心情をカウンセリングマインドと言います。

しかしこのエピソードはもう一つ別のことを示唆してくれます。掃除当番を真面目にやることはなぜ賞賛に値するのか。それはみんなのためにする活動だからでしょう。学校には日直当番とか給食当番とかの当番活動と、生き物係とか学習係とかの係活動がありますが、どちらもみんなのために力を尽くすことを任務とする活動です。テストで良い成績を収めることは、賞賛には値しますが、みんなのために力を尽くしたことにはなりません。

掃除当番は忌むべき仕事ではないのです。教科の学習活動より生徒達には価値のある教育活動なのかも知れません。